書評

渡辺久雄著『甲東村から—呉下の阿蒙』

（のじぎく文庫・神戸新聞総合出版センター）

昨年末、史料室の室長であった渡辺久雄先生から新著『甲東村から』を頂戴した。昭和十七年（一九四二）、先生は『甲東村』という本を出版され、戦後間もない昭和二十三年（一九四八）には、改訂版を出版されている。今度の著書は、この本の続きと言ってよい。

第一章「地誌の源流」では、著者は、日本で書かれた『古風土記』や中国で書かれた『漢書地理志』にまで遡って、地誌の起源を明らかにすると同時に、明治二十二年に市町村制が施行されてできた甲東村を構成していた六つの村、即ち段上、上大市、下大市、門戸、神呪寺、上ケ原新田、樋口新田について合併以前の明治十年代に書かれた地誌を紹介している。

これを読むと、下大市に三十年以上住んでいる私などが全く知らなかったことが書かれていて面白い。例えば、下大市村の地誌によると一里離れた五ケ山に飛地があったことが分かる。また下大市村には当時二六もの字地があったことも分かる。それらが殆ど失われてしまい、僅かに野間や若山が下大市とは独立の町名となって残っているだけなのは残念な気がする。

女学院を初めて訪れた者は、デフォレスト館の北側に立っている岡田神社を見て、なぜミッション・スクールのど真ん中に神社があるのかと不思議に思う。この本によると平安時代に編纂された『延喜式』に摂津国にある四つの神社の一つとして「岡田神社」の名前が挙げられているそうだが、女学院内の岡田神社は、昭和十五年（一九四〇）以前にはただの石の祠であったに過ぎず、『延喜式』に記載されるほどの神社であったようには見えない。市内小松南町にもう一つ「岡太神社」というのがあって、ここには鎌倉時代に建てられた十三重石塔が二基あり、「式内社」の碑もあるそうである。これではどう見ても「岡太神社」のほうに歩がありそうに思える。しかし、歴史地理学者である著者は、同じく『延喜式』に載っている広田神社と名次神社と岡田神社の地理的な位置関係を調べて、岡田神社のほうが当時の神社の立地条件を満たしていることを指摘する。更に岡太神社の神社誌に載せられている「武庫郡広田村の人岡司氏此地を開発して浜村と称し云々」という記事については、当時「この付近に開発できるような土地があったかどうか」疑わ

しいし、岡司という姓は電話帳に一軒もないなどの問題点を挙げて、女学院の中の岡田神社のほうが『延喜式』に記載された「岡田神社」であろうと結論している。

第二章の「源流を求めて」では、「兵庫県水系図」を製作する際に、一一二枚の二万五千分の一の地形図から河川だけをどうやってトレースし、それをどのように継ぎ合わせ、写真撮りするか、更にそれをどのように印画紙に引き伸ばし、更に継ぎ合わせるか製作の苦心と工夫が詳しく述べられている。こうして三か月もかかって作られた「水系図」を眺めていると、「大きな河川の分水界を持った山脈、深い渓谷、ヤマメの泳ぐ谷川がスギ・ヒノキの人工林、トチ・ケヤキ・ブナなどを混じえた雑木林の間を縫って流れる姿が想像できて大変楽しい」と著者は書いているが、これこそ研究者だけが知っている楽しみなのであろう。

第五章「武庫川を渡る」では、旧甲東村の一部をなす段上村に残された「村方明細帳」を史料として、江戸時代の武庫川の渡しについて述べられている。。それによると、一文を一二円強に換算して、輦台を渡す場合の費用が一四万六八〇円にも達したそうで、増水した川を渡して貰うには驚くほど多額の費用がかかったことが分かる。

「村と小学校」と題された第七章では、西宮市内の小学校の創立年次について触れながら、著者は社会調査で訪れられた鳥取県三朝町の小学校の分校の先生や生徒たちや村人との心温まる交流を書いておられ、著者の行動に裏付けられた人間愛は、読む者の胸を打つ。

巻末の「愛犬メーメル物語」では、長崎高商の教授時代に先生が経験された原爆投下後の長崎の悲惨な状況や、先生と奥様のご苦労を知るとともに、愛犬メーメルを自転車で長崎から熊本へ、更に汽車で熊本から西宮へと運ぶ際に示された先生のご苦心と動物に対する愛情にはとても感動させられた。

渡辺先生は、この本の「まえがきに代えて」で、自分は「呉下の阿蒙」に過ぎないと謙遜しておられるが、本書は、歴史地理学の専門家として、長い年月、研究と調査を続けてこられた先生だけが書き得る極めて貴重な本だと言える。旧甲東村や西宮の地誌に興味を持つ人は、本書から多くのことを学ぶに違いないし、また、渡辺先生を個人的に知る人は勿論のこと、先生を知らない人も、著者の学識の深さと人間としての生き方に深い感銘を受けることだろう。

（史料室長　大野篤一郎）